

# 討論会

## 【パネリスト】

わたなべ かずお 渡辺 一雄（梅光学院大学教授）

たばた なおひこ 田畠 直彦（山口大学埋蔵文化財資料館助教）

かわた さとし 河田 聰（下関市鳥山民俗資料館館長、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム主任、豊浦教育支所主任）

みやた よしのり 宮田 佳典（一佳窯）

## 【コーディネーター】

よしだめ とおる 吉留 徹（下関市立豊北歴史民俗資料館館長、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム学芸係長、豊北教育支所主任）

ささだ あさみ 佐々田 麻未（下関市立豊北歴史民俗資料館嘱託学芸員）

吉留 討論会のコーディネーターをさせて頂きます、資料館館長の吉留といいます。ただいま質問の方が、7件ぐらいあがってきております。のちほどお



吉留 徹

こなう討論会の中で出てくるような質問については、その時に答えて頂くような形にしまして、渡辺先生に質問が出ているところが3件。それから河田先生に1件。宮田先生に1件出ておりますので、それぞれ、お答えして頂きたいと思います。時間が一応3時30分までの予定ですので、進め方等いろいろ不備があるかと思いますが、ご協力をお願いいたしたいと思います。

まず1点目が、これお名前を言った方がよろしいかどうかなんですが、「須佐唐津焼及び古九谷焼は佐賀の唐津焼が源流との論争があると聞いていますが、どうでしょうか?だとすれば北前船の流れで伝搬したのでしょうか?」という問いただします。

渡辺 失礼いたします。古九谷焼については

ちょっと詳しくないの  
でどなたか先生方、お願  
いできればありがた  
いんですが。須佐の唐  
津焼でございますが、  
お手物の資料に若干沿  
革を書いております。



渡辺一雄

唐津の集落で今も、そのご子孫の方がやきものをやっておられるんですが、その土谷さんというお宅の家伝に、「往古唐より来国し肥前にて唐津山を始めた祖先が須佐に来住し開窯した」という、伝承がございます。実際に発掘をしますと、講演のなかでも申し上げましたが、最下層の物原の中から、古唐津系の叩き技法を持つ製品などが出ますので、須佐の唐津窯が、唐津焼の技術を元に開窯されていることは間違いないと思います。

それから、北前船との関係ということですが、北前船というのは、西回り航路が開かれてからそこに就航した船を指します。時期的にみると、北前船とは直接は関係ないと思います。ただしそういう廻船ですね。そういうものは中世

からございますので、そちらとの関係は少しあるかなと思います。江戸時代の唐津の製品は、最近の調査では金沢の城下町や、富山県、秋田県、それから当時の蝦夷地、北海道で、特にすり鉢と鉢が出ておりますので、こういうものは北前船を介して流通したんじゃないかなと考えております。以上です。

吉留 それからまた渡辺先生への質問なんですが、「下関の松風山で李勺光が毛利秀元の命により開窯したとの説がありますが、いかがでしょうか？」というご質問です。

渡辺 あまり詳しくないんですけど、伝承では慶長年間に、初代長府藩主の秀元が朝鮮陶工を伴って、長府の逢坂山、長府から一の宮に抜ける古い道があるんですが、そこで開窯させたという伝承があるようです。それを裏付ける資料はないんですが、ただ明暦3年（1657年）萩焼の深川三之瀬の焼物所の開窯後まもなく、焼物師赤川助右衛門の家人が長府に招請されているという文献があるそうです。こういうところから総合的に判断すると、最初に萩焼を開窯させた、李勺光と李敬というのがいるんですけれども、その李勺光がのち、長門の深川に移りますので、おそらくそういう経緯の中から、李勺光が秀元に招かれて開窯したという説がでてくるのではないかと思います。ただそれが正しいか、正しくないかというのはちょっとわかりませんが、そういう背景がございます。

吉留 今、李勺光、李敬ということで、質問が一つでてたんですけれども、この二人は朝鮮半島のどこから来日したのか、ということだったんですが、このメンバーではわからないということですので（笑）ちょっとこれは宿題にさせていただきたいなと思います。

では、最後の渡辺先生への質問です。「渡辺先生のお話で肥前系という言葉が出されていま

したが、これは、唐津それとも伊万里どちらでしょか？」というご質問です。

渡辺 申し訳ありません、少し曖昧な表現をしてしまいました。私が肥前系と通常使うのは、磁器ですね。磁器で肥前系と使っていきますので、有田系ということでございます。唐津系統のものは唐津と使うと自分自身では思っておりますが、ちょっと曖昧な形でお話してしまいました。申し訳ございませんでした。

吉留 続きまして、河田先生のほうに質問があります。「大正期の不況が豊北焼の衰退に影響した可能性もあるのでしょうか？」というご質問です。

河田 大正期の不況の一つの要因というのは、まず、第一次世界大戦の主戦場になったヨーロッパで、窯元というのが壊滅的な打撃をうけるわけなんです。その中で、ヨーロッパの窯元が市場に復帰する前に、日本のやきもの产地というのが、どんどんヨーロッパに輸出します。しかし、ヨーロッパが復興してくると、市場にどんどん参入し



河田 聰

てきます。すると、当然供給過多という状態になってきて、そのなかで、日本製品というのはヨーロッパ市場から、追い出されているという状況になります。その中で、あらたな販路として、それまで輸出を中心におこなっていた業者さんが、国内向けに流通させようとします。それと一緒に、この大正時代というのは、西洋的な食器などの文化が流行するようになります。その中で、輸出をそれまでおこなってきた業者さんが、問屋さんを中心に国内向けに持ってくる。これが、まあ小さな地方の窯元、磁器を特に焼いていた地域が衰退していくひとつの

要因ではあると思います。

ただもうひとつ、忘れてはいけないことというのが、ひとつは鉄道がどんどん開通する時期であります。大正時代というのは、たしか何年ですかね、滝部が開通するのが大正の？

吉留 12年。

河田 ですよね。その時期になると、鉄道を元に、特に岐阜の多治見や美濃の問屋さん、ここ の問屋さんは非常に強くて、それぞれの地域を 担当した人間が、新しいやきもののサンプルを 持って、どんどん鉄道を利用して渡ってくるん ですが、そういう人たちがくる。たしか豊浦町 の小串にも、瀬戸などの専門の卸しというか、 焼物を扱う業者さんがいたようですので、そ ういう人たちがどんどん入ってくる。特に瀬戸は 機械化されていて、安い陶磁器がどんどん作 られています。そういうものが、流通してくると、なかなか地方の小さな窯元というのは太刀 打ちできなかつた。それがひとつの衰退の要因 じやないのかな、というふうに私自身は思って おります。

吉留 ありがとうございます。最後の質問です。 今度は宮田先生なんですが、「今までの、テス ト焼成で、呉須の発色の一番よかった焼成温度 は、何度ぐらいだったでしょうか？」というご 質問です。

宮田 基本的に、主觀の部分が大きくなるんで すが、僕自身が焼いたなかでは、それ自身は失 敗したんですけど、1250℃ぐらいで焼いたとき が一番発色がよかつたと感じています。それ以 上の温度っていうのは、一回ぐらいしか焼いて なくて、1300℃近くまではまだ上げていません。 半磁器なので、あまり上げると今度はやきもの が崩れちゃうっていうか、形が歪んじゃうんで、 そこまでのテストはできません。1250℃で 焼いたときも、ちょっと釉薬が弱くて、流れ

ちゃったんですけど、そのときの発色が、逆 に一番よかつたように自分では感じてます。 ただ主觀ですから、呉須っていうのも本当に たくさん種類がある



宮田佳典

し、業者さんによっても全然違うので、主觀で 申し訳ないですけど、そういうふうに自分では 受け止めてます。

吉留 はい、ありがとうございました。今一応、 各先生方を指名されての質問だったんですけれども、フロアの方で、どうしてもこれだけは聞 きたいとか、今のお話を受けてもうちょっとこ ういうところだけ聞きたい、という方があれば、 挙手をお願いします。なければ、討論のほうに 入りたいと思います。討論のほうの時間が余れ ば、また個別にご質問を受けたいと思います。 よろしいでしょうか。

それで、私が一応コーディネートしますが、 私も専門が民俗という学問で、なかなかわかり ませんので、隣に今回の特別展「器ー形と技ー」 の展示実施をしていただきました、佐々田のほ うに、私の補佐でついてもらっておりますので、 詳しいところは、彼女の方に振りたいと思って おります。

それで、今ずっと話を聞いてる中で、ひとつ だけ言葉の問題がありまして、それは何かとい いますと、「豊北焼」という言葉なんですね。 豊北焼という言葉は、今宮田先生のほうが作ら れている、新しく復元した焼物を指して、豊北 烧というふうに言っております。それ以前に、 この地域で焼かれていたやきものに対しては、 その地域で焼かれた田耕焼であるとか、原焼、 あるいは北浦焼というような名称がありました。 今回の特別展の中で一番悩んでいたといい

ますか、焦点を当てたのは、北浦焼という磁器のやきものが、どうしてこの地域にあって、それが明治から大正にかけて、急激になくなっていくのか。そういうところを、中心的にみていくたいというふうに思っていたわけです。

それで、「北浦焼」という名称と、「豊北焼」という二つの名称がありましたので、今から話としてあがっていくのは、大体北浦焼のほうですね。いわゆる近世から近代にかけてのやきもの、磁器製品というものを中心に、シンポのほうを進めていきたいというふうに考えております。

それで、かつて豊北地域でおこなわれていた窯業、特に磁器窯なんですが、それが今回、一佳窯の宮田先生によって復元されました。さまざまな胎土分析をされて、豊北焼の特徴が大体明らかになったんですけども、実際に、北浦焼そのものをみていくと、ひとつは、先ほど渡辺先生が言われました、肥前系や伊予系(砥部系)、萩焼系などが入ってきてるというふうにいわれていますが、実際にそういう技術をもっている人間が、例えば集団として存在していたのかということですね。先ほど渡辺先生の話の中で「スエ」というような地名が中世の時代にあって、それぞれの集落をつくっていたというようなことを考えると、そういう何かしらの技術をもった集団というのが存在していたのかということを、まずは手がかりにして考えて、北浦焼の謎に迫っていきたいというふうに思っております。

それで、豊北地域の製品をみると、ひとつは御用窯、いわゆる藩窯といわれる飯の山があり、それから民窯といわれる原窯があり、そして、北浦焼という名前の大きな流れが実際にあると思われるんですけども、そういう技術者集団の系統的な存在というのものは、実際にあったん

でしょうか。これは渡辺先生お願いします。

渡辺 非常に難しい問題で、私もよくわからないんですが、たとえば木地屋という仕事がございます。これは漆椀の木地あるいは木製の容器を作る職人なんですが、その木地屋の人たちというのは基本的には個人なんですね。そして、どちらかというとそういう職人の移動はなくて、家族ずっと移動するような人たちです。それから杣という集団ですね。これは木こりさんです。杣という集団は、親分みたいな人がいまして、その下に職人集団がいて、その親分の人と雇用主との間で雇用関係を結びます。よって、職人たちと雇用主の間で直接の関係はないんですね。その親分にあたる人との関係があるというだけです。このように、いろんなタイプがあるんじゃないかなという気がしております。

そして、やきものを考えますと、基本的にはマニュファクチャ化していない、つまり企業化していないのが特に多いんですね。また、山口県域の窯業生産は基本的には個人経営のようなものなので、そういう職人集団を雇い入れてはひょっとすればあるかもしれないですね。なので、例えば必要な職人を一人呼んでくる、といったような形が多いようでございます。



会場の様子（1）

じゃあその職人を、どういうつてで知るのかということですが、そのあたりがよくわからないところがございます。だから集団というのは、なかなかみえないところがございます。

**吉留** ありがとうございました。それでいわゆる原窯のほうの、田耕焼の職人の中に、福岡の須恵村から職人さんが入られてるんですね。先ほど宮田先生のほうから「窯ぐれ」という流れ職人の話が出てましたけども、そういう個人で動く方々っていうのは、例えば、近世の段階にはどういうルートで他の地に入ってくるのか。技術のある方はぜひ来てくださいというような、技術者を受け入れる特権的な制度が、山口県の藩の政策としてあったのか。そのようなことについてはどうでしょうか。

**宮田** 僕が知っている限りだと、そういう文化じゃないですね。窯元に本当に一人の流れ者が行って、例えば引いてある器や、やきものをわざと壊したりするんです。で、「お前何やってんだ」と言ったら「すいません」と。それで「僕が作れるから代わりに作ります」と言って作ったものが「おまえ、うまいじゃないか」となる。それで「じゃあ雇おうか」みたいな話になって、入り込んだりしてるっていう話を、僕は本で読んだことがあるんですよ。

基本的に、大きな産地でも、窯ぐれっていう人たちはちょっと警戒されているんですね。やっぱり悪いことをいっぱいする人が多くいたみたいで、それで、窯元を飛び出していったという人がいたようで、ちょっと警戒されるんです。ただやっぱり技術をすごくもってると、窯主としては雇いたいって思いますよね。例えば一時間で普通の人が 50 個しか作れないものを、100 個作るとかいったら、それはやっぱりどうしても欲しいですから。ただそういう売込みみたいな感じで往来していたっていうような文献

を、昔ちょっと読んだことはありますけど、組織的な、人材派遣センターのようなものがあつたとは、ちょっと僕は知らないですね。

**吉留** はい、ありがとうございます。それで、そういうような地域に職人が入ってきて、いろんな悪いことをしたっていう話は、実は神崎宣武さんという、民俗学者の方が書かれた、『やきもの風土記』という本の中に出てくるんです。それによると、この山陰に上がっていく段階で、流れの職人が窯元をだますわけですね。一年目に急に入ってきて、ここではいいやきものができるよっていう話をします。それから作るけれども、なかなかうまくいかないなという話になると、それは土が悪いんだとか、あるいは焼き方が悪いんだということを言うんです。そして、大体三年ぐらい経ってある程度お金をもらったら、そのまま逃げちゃうっていうようなかたちがあるということなんですね。そういうわけで、そういう職人が、地元の庄屋クラスの人などにいろいろ話を持って行って、悪く言えば踏み倒していくっていうようなことも、おこなわれたようです。

実際それが原因かどうかはわかりませんが、明治から大正末にかけて、豊北地域の窯っていうのがほとんど廃業に追いやられていくわけですね。先ほど河田先生のほうから話もありましたように、個人的な趣向から工業製品にどんどん変わっていくというような流れのなかにあって、豊北の窯場が廃れていく理由、胎土の問題、流通の問題などについて、まずは河田先生のほうからお願ひします。

**河田** 先ほどひとつ説明したんですけど、ひとつ、流通上の問題は、やはりいくらい技術を持っていても、基本的には焼物を売る人たちがないとなかなか売りさばけないという状況があります。ですから近世、近代に関しては、特

に問屋さんの力というのが非常に強いと私は思っております。この問屋さんがいかに機能するか、いかに売り込めるかという力で、その製品が売れると思います。私自身この豊北町のやきものを見ましたが、そんなに下手というわけじゃない。非常に上手なものもたくさんございます。技術はあったと思うんですけども、それを売るためのルートがなかった可能性もあるんじゃないかなと思います。

特に下関の状況などを見ると、たしか文献の中で見たことがあるんですけども、長崎から朝鮮半島などに輸出するのですが、そのときに山口県のものは一旦下関に出しているわけです。その下関から長崎に集めて、長崎から外国に出すといったような感じで、下関の問屋さんが直接売り込むわけではなく、やはり昔から強い長崎を介している。長崎というのは、大陸や朝鮮半島に対して非常に独自のルートを持っていて、大量にやきものを焼かせて売りさばく技術をもった問屋さんが、たくさんいらっしゃいました。それが機能していたというのが、ひとつの大きな要因だと思います。そういう問屋さんがいるかいないかということで、非常に変わってくると思います。

もうひとつは、特に長崎の状況ですね。長崎から売る場合っていうのは、当然近くの窯元から持ってきたものを売った方がいいわけです。なので、その中で生産できない場合ですね。さらに大陸で供給が必要となったときに、それ以外の地域からもってくる、というような状況もあったようです。ですので、そういう場合に、たとえば山口県の地方の窯元から仕入れたものを、有田の方、長崎のほうから輸出していくという状況があったようだったので、そういう問屋さんのルートがあるかどうかというのが、廃れる原因になったのではないかな、というふうに

私自身は思っております。

吉留 それから、もうひとつは窯場についてお願いします。

河田 胎土の問題、土の問題ですよね。近代は、実は土の流通というのが非常におこなわれている状況にあります。明治時代に入ると日本窯業協会というのができる、窯業雑誌という協会の雑誌ができます。そのなかでどういう土を使ったらどういうやきものができるとか、こういう釉薬はどういうふうにものを集めたらできるというような、かなり技術的なことを出していました。その中で、この土を使つたらいいですよ、という話があるわけなんですけれども、その土というのがやっぱり流通しているものなんですよ。ですが、こういう土を使つたら、こういうきれいなものになりますというのが一般的な常識になっていくと、その土を仕入れることができないような、地方の小さな窯というのは、非常に生産をしにくくなるという状況が考えられると思います。

渡辺 ちょっと県内の窯業を見ますと、大体大正の終わりから昭和の初めぐらいに廃業するところが非常に多いですね。だからやっぱり大正不況と呼ばれるものの影響もかなり強いんじゃないかなというのは個人的に思うんですけど、基本的には、江戸時代の陶磁器の需要というの



会場の様子 (2)

は、都市部、あるいは上層の階層ぐらいしかないんですね。ところが近代になりますと、庶民の間にも陶磁器を使うことが増えてまいりますので、需要が増える。そうなると、やはり企業的に生産をしていかないと太刀打ちできない。唐津や瀬戸、あるいは有田など、そういうところには太刀打ちできない。そう考えますと、例えばこの北浦で何か組合を作って、常に技術革新をしたり、機械化したりということがどうもみられないで、そういう企業化に乗り遅れたというのも、ひとつの原因としてはあるんじゃないかなという気がします。

また、ちょっと面白いのはこの山陰線ですね。あれは長州鉄道ですかね。その工事がずっと進んで大正12年ぐらいに開通するわけなんですが、そうすると、鉄道敷設のためにレールの下に枕木を入れますよね。それから明治の終わりぐらいになると、八幡製鉄所ができまますね。そうすると石炭需要が増えまして、筑豊炭田がものすごく盛況になります。そうすると坑木が必要なんですね、つまり木材の需要がものすごく増えるわけです。そうなると、今まで燃料として使っていた材木の確保などに、ものすごくコストがかかるようになる。それも原因としてはちょっと面白いなと思います。それから全体としては、賃金、あるいは諸物価が高騰するとか、いろんな複合的な要因がこの時期に重なっていくんじゃないかなという気がしております。

**吉留** おそらくそういう流れの中で、国内だけではたぶん対応ができなくなっていくんだと思います。ということで、この「北浦焼」という製品も、実は朝鮮半島それから中国の方への輸出が、最後の生き延び策というような形でどうも動いていたみたいです。そして、そのためには、韓国の方の好みにあうような形で製品を

作っていたような経緯があるらしくて、それはたぶん河田さんのが詳しいと思いますので、そこら辺の話をさせていただければいいなと思います。

**河田** この時代に、やはり韓国というのは非常に大きな市場になります。この時代に書かれてる記事なんですけれども、韓国がどういうやきものを使っているかというと、一般的には陶器、そして、それ以外は真鍮製のうつわをつかっている。まず真鍮というものは、韓国は寒い地域だから非常に使いづらいとしています。またこれは、裕福な人たちが真鍮をつかっていると記されています。もう一つの陶器というのは、寒い時には凍って割れてしまう。だから磁器を売つたら絶対に韓国でもうかりますよ、という話があるわけなんです。その中で韓国の方は、特にどういう好みがあるかというのを日本の問屋さんが調べていて、そのなかでも、今展示をしている「福寿」という文字がございますよね。ああいうものが、非常に韓国では好まれるというような市場のデータを取ってきて、そういう製品を各地で売るようになります。特にこの豊北、北浦では、この福寿という文字がはいったやきものを、韓国向きにかなり流通させていたというのがわかっています。基本的には下関からですね、独自に輸出していた時期もあったようです。それともうひとつは、長崎を介して出していったというふうな事も言われておりますので、この二つが、考えられています。

**吉留** 実際に展示の会場を見て頂くとよくわかると思いますけども、今まで、北浦焼って言ったときに、皆さん方がイメージされてたやきものっていうのは、原窯でみられるような、色絵を使ったやきもの、いわゆる錦手窯のことをさして北浦焼というような名称がどうもあったようなんです。しかし、実はそうではなくて、日

常的な雑器類、先ほど河田先生が言われましたように、いわゆる福寿みたいなベロ藍を使った物の、海外輸出用のための名前として、北浦焼という名称



佐々田麻未

があったんではないかなという風にちょっと考えてるんです。ただそれを裏付けるような資料というのは、実はなかなかないんですが、今回そのひとつの流れの中で、うちの佐々田が新聞関係をいろいろ整理してくれたので、その話を少しちょとやつてもらえたらしいかなと思います。

**佐々田** 先ほどの、河田先生が館長を務めているらっしゃいます、鳥山民俗資料館さんが所蔵されている、『長州育英』という新聞があるんですけども、今回はその新聞を主に調べました。その中で北浦焼という名称が使われている箇所を抜き出して、どういったふうに使われているのかというのを若干考察した結果を、今回展示にさせて頂いています。『長州育英』の中に出てくる北浦焼ですが、長いという字で、長商店と読むんだとは思うんですが、その商店が北浦焼を販売しているというような広告がでております。これは明治の末期ですね。その長商店というのが何なのかというのは、はっきりとわからないんですけども、ひとつは、豊北町の境下窯ですね。その経営者の一人に、長仲藏という方がいらっしゃったという文章があるんですけども、その方と関係があるのではないかと考えています。というのも、『長州育英』のなかで、北浦焼という名称が、境下窯のほうにも少しでていたりするので、なにかしら関係があつてそういった名称を使っているんじゃないかなというふうなことを推測しております。展

示のほうは、他に元になった資料などをおいておりますので、さらにわかりやすいと思います。終わります。ありがとうございます。

**吉留** 詳細は、図録の方に書いていますので、是非ご購入して読んでいただければありがたいなと思います（笑）少し話の方が技術の方から離ましたが、実は、そういうような磁器を焼くためにはある程度の人数が必要で、よその技術がどうしても必要がありました。しかし、その窯場は、明治、大正にかけて廃れていくわけですね。しかし戦後に、実は豊北町の中でこの焼物をもう一度復活しようという動きがありました。先ほど宮田先生が、80年前に一度復活したっていうことされましたけども、実はそれは、この豊北の滝部でおこなわれた、滝部焼というものです。その時に関わった方が、実は中山太一さんで、この太翔館を建てていただいた方です。その方が、今から地域の産業のためには何かをしないといけない。農業、漁業、あるいはそれ以外の、日本が近代化していくなかで地域に残せるような、いわゆる技術的な物をきちんとつくっていかないといけない。这样一个なかで、昭和21年に日本が戦争に負けた後、戦後復興する時に目をつけられたのが、豊北地域にあったやきものということなんですね。その技術に関わった人は、実は中原窯の方、それから長門の松尾晚翠という、絵を描かれるかたがいらっしゃるんですが、その方の息子さんが最初にされます。しかし、わずか三年でできなくなってしまいました。

それは、ひとつは日常雑器ではなくて、いわゆる芸術的な茶陶とか、そういうようなことをされたみたいなんですよ。どうもこの地域の中ではそれが根付かなかったようなんですけども、そうやって考えると、その技術そのものをどうやって根付かせていくのか、その地域の中

に残していくのかということが、非常に難しい  
ということがよくわかるんです。

今回、宮田先生がいろいろ復元されたわけなんですけども、少し先ほどお話をされました  
が、技術者として今後どういうような方向性でいか  
れようとしているのかということですね。これ  
は他の先生方にもぜひお願いしたいんですが、  
特に伝統工芸というような形の中で、どうやつ  
て技術伝承をはかっていくのか。そういう伝  
統工芸に必要な物について、具体的にどう応用  
したらよいのかと、豊北焼の復興についてとい  
う質問がでていますので、田畠先生や宮田先生  
に、そのあたりの伝統工芸との関わり合いのな  
かで、技術伝承について思われるがあれば、  
お話を聞いていただけるとありがたいなと思って  
ます。

**宮田** 基本的に磁器系の伝統工芸の技術ってい  
うのは、有田のほうなんかは完成されてるところ  
がありますね。絵付にしても造形にしても完  
成されているので、それと同じことを後から追  
いかけても、僕自身の技術の問題もありますが、  
かなり難しいと思います。有田焼はやっぱり  
真っ白ですからね。そこに美意識があって、あ  
あいう造形や絵付が存在しているわけで、そこ  
を追いかけるようにして別の形を探っても、既  
存の伝統工芸として太刀打ちできるような状況  
ではまったくないと思います。だけど、逆に民  
芸の磁器って日本にあまりないんですよ。だか  
らそっちの方向で豊北焼っていうものができたら  
いいと思っています。

昭和の初めの頃、民藝運動っていうのがおこ  
るんですけど、それは伝統工芸というものに対  
して、庶民が使うものが本当に美しいんだ、と  
いうようなそういう美意識をもった柳宗悦や、  
バーナード・リーチという人たち。同じく濱田  
庄司もそうですけど、それらが活動しはじめる

んですね。そういった方向での美意識ですよ  
ね。技術的にハイレベルな緻密で精巧な物の完  
成度じやなくて、焼物自体の暖かさみたいな方  
向での伝統工芸に持っていく。そっち側の系列  
で続していくほうが可能性は大きいんじゃない  
かと、僕は今思っています。そんな感じです。

**田畠** 先ほどお話をさせていただいたように、実  
態は残念ながら、なかなかやきものが売れない  
状況です。特に食器の場合は、どこの産地の物  
も機能の差がそれほどありません。極端な話、

100円ショップで買っ  
てきた物でも、用とし  
ては足りるわけです。  
そういう大変厳しい状  
況のなかで、どうして  
いくかということにな  
ると、値段や機能とは



田畠直彦

別に、付加価値が必要だと思います。例えばみ  
なさんがどこか旅行に行かれたとします。その  
際、やはり地元の器で地元の食材を食べたい  
じゃないですか。上記は一例ですが、今後、豊  
北ならではの付加価値をなんとか見つけて生き  
残っていくというか、創造が必要ではないかと思  
いました。

**吉留** ありがとうございます。なかなか14ヶ  
所あった窯が、減んで行ったっていうのは非常  
に残念ではないかな思います。一つは今このシ  
ンポジウムを機にですね、もういちど地元の郷  
土資料の可能性といいますか。今後どういう風  
にしていくかということですね。今回も宮田先  
生が、ものすごく苦労して復元されたんですね。  
何度か土を色々な形で作られて、集められて、  
それで、本当にとの形に近いような土と石を  
使って復元されております。先生そのものは、  
まだまだ納得する作品はできていないとい  
うことなんですけども、見るとやっぱりすごく素敵

な器になっています。

宮田先生の先ほどのお話の中で、昔の人と土の感覚が違うというお話が出てきました。今は大量生産みたいな形で、土が均一になってきているけれども、そうではなくて、昔の人がその土を使ってそのやきものを作っていたように、地域の土を使って地域の焼物を使っていくというようなことが、ひとつは大きな今後の展開になるのではないかなと思っています。

たとえば地域おこしの一環として、豊北焼あるいは北浦焼といいますか、こういうものを、今後どのように活用していくのかということに関して、先ほど田畠先生のほうから少しお話があつたんですけども、他の先生方にも、そのアイデアと課題みたいなものを、一言ずつお話して頂ければありがたいなと思っています。

**渡辺** 今お話がありましたように、陶土ですね。これはやはり基本的にはかつてここで焼物生産がおこなわれていた時の陶土をぜひ使っていただきたいと思います。それから磁器といいますと、原則陶石というものを使っていくわけなんですが、豊北のやきものについては、これに白色粘土を加えておりますので、これがひとつの個性ではないかなと思います。そのあたりを是非大事にしていただければと思います。それから、ちょっと関係ないんですが、みなさんは原窯や中原窯に行かれたことがございますでしょうか。両方共に、近代の窯場がほとんどすべて残っております。中原につきましては、本当に窯場全体が残っているんですが、ただ昨年に再度行ってみたときは、もうまったくわからない状態でした。また、原窯についても窯場全体が残っております。

全国的にみると、古い時代の須恵器の窯などを保存している例は沢山あるんですけども、近代のやきものの窯場を保存している例がほと

んどないんですね。それで、もし可能でありましたら、ひとつはやはり残して、この北浦で窯業生産がおこなわれていた象徴、あるいはそこでの学習ができるような場として、是非残していただければありがたいなと思っております。

**河田** 先月、東京の方に行く機会があつて、とある有名な雑貨屋さんというところにいったんですけども、そこにいくと、堀越の小さな焼物が売ってあったわけなんですね。あーすばらしいなと思って。どういうルートでこれを売ってるんだろう？なぜ堀越がこんなところにあるんだろう？と思ったんですけど、やはりいいものというのは、目利きのような人たちがいらっしゃって、それで仕入れて売られている。そして、場所によってやはりかなり売れる。ですので、やはり、良いものは良いものとして、どんどん皆さんが宣伝していく。あるいは行政が中心になりながら、サポートしていくという部分も当然必要だと思います。

また、この前山口で、アーツアンドクラフトという、ものづくりの人たち大きなイベントを行ったときに驚いたんですけど、やきものを焼く人たちの中に若い人が、たくさんいらっしゃるわけなんですよね。窯や伝統に縛られないで、個人の名前として、地域に縛られないやきものをされている、非常に魅力的で好きな物を焼いている人たちなんですけども、若い人に、結構そういう人たちがいらっしゃる。どのくらいもうかっているかというのはなかなか聞きにくいので、私も言えなかつたけれども（笑）まあ30代とか40前後ぐらいでたくさんいらっしゃるところをみると、やはりそういう人たちっていうのを、できれば地域に誘致するような運動ですね。例えば空き家でそういう人たちを呼ぶような形など、そういうので、なにかもっとやきものを文化として復興させるための活動がで

きたら面白いのかなという風に個人的には思っております。

**宮田** 僕は、作り手なんで、今の話をただただプレッシャーに感じるだけで（笑）。でもやっぱり、若い人やクラフト系の人とかで自由にされている人がいるので、ちょっと粘土を提供して、こういうのでやってみませんかみたいなこととか、本当に古い家や民家を開放して、ちょっとギャラリーみたいの自分たちでやりませんかみたいな活動っていうのは、ほんとにやってもらうといいですね。広まるっていう事が大事ですし。まあ理想を言えば、僕がなにか大きい賞を豊北焼でとったほうがいいんでしょうけど、そんなに簡単な世界じゃないんで。まあがんばってみますけど、そういう感じですね（笑）。

**吉留** もう時間があんまりないんですが、考古学の視点から新しい見方をしていただいている田畠先生に、僕の方からひとつだけお聞きしたいと思います。実際に注文されて、大甕をつくれられたといわれていますが、あの大甕はだいたい金額的にはどれくらいかかるんでしょうか？

**田畠** 個別の値段は言いにくいので、最安値と最高値を申し上げます。さきほどご紹介した甕は、いわゆる二斗入の甕です。一斗が約18ℓですから、約36ℓ入りの甕になります。この二斗入りの甕で、最安値が3万円、最高値が20万円でした。

大きなものの価格がなぜ高いかというと、製作時のリスクが高いことが要因です。つまり一個製作するとしても失敗する可能性があるので、何個か製作します。具体的には大体四つか五つぐらいです。また、需要がないため、どうしても値段が高くなります。ただ昔はたくさん作っていたので、3万どころか今でいうと数千円以下ですね。そんな値段だったと聞いています。

**吉留** ありがとうございました。やはり問題は消費者の問題だろうということですね。本物はどうしても今は高くなってきたわけですが、今の日本のやっぱり良くない所は、物作りをしようということになれば、ある程度お金がかってしまふことです。なので材料も含めて、それを作り上げる人そのものですね。大量化しない昔の日本の形というものを、もう一度再現するということは、実は、ここのフロアにいらっしゃる皆さん方の力がないと、これは絶対できないなというような形になるんじゃないかなと思います。

大体時間になりましたが、フロアのほうから何かここは聞いておきたいということとか、この先生にというのがあればお願いします。

**質問1** 田畠先生に、とっても初歩的な話を聞くんですが、叩き技法が使用されるようになったのはどれぐらいからなんですか？ 粘土でくみ上げて、板で叩くっていう技術はいつぐらいから？

**田畠** 弥生土器の基本的な製作技術は、約2,500年前（最近はさらに4,500年さかのぼるという説もあります）に朝鮮半島から技術が伝わってきて、その技術をベースに製作されたと考えていますので、その頃から使われている技法と考えています。



会場の様子（3）

**質問2** 宮田先生にお伺いしたいのですけれども、ちょっと引っ越しをして、荷物がはいりきれませんでしたから、ガラス器、陶磁器の類を全部外に置いておいたんですね。

そしたら、2、3年ぐらいして、陶器は良かつたんですが、つい五年ぐらい前に買った、綺麗な透かし彫りの蓋付が、ぼろぼろ土のように崩れてしまって、もうがっくりきてるんですが、うちのせいでしょうか？現代の品物って悪いな、見かけに騙されてたと思って、今愕然としてるんですけど。

**宮田** 基本的に磁器が風雨にさらされて、そういう風になるっていうことは、常識的にまずありえないんで、それは磁器じゃなくて、他のものだと思いますね。焼物じゃないと思います。なんか、他のもので加工されてるようなものだったんじゃないかなと思いますね。

**質問3** おたずねなり、意見をなんですが。まず1点目は、私が思いますのに、江戸末期から大正期ぐらいまで、豊北で10いくつの窯があつた理由の一つに、窯場の近くにその窯独自の割合良い土が出たこと。例えば原なら原のすぐ近くに、そして向坊、それから中原でも近くで非常に良い土が取れたことがあると思うんですよね、わりあい豊北町には、磁器質のカオリン系の良い土がたくさん出ておる。そういう胎土、土そのものの研究のようなものですね。原の石を使ったらこういう風になる。神田の石をつかったら、こういうふうになるというよう、土そのものと、その窯の作品の関係のようなものが、これから一つの研究課題として、存在をするのではないだろうかと思います。たとえば今の有田焼でもほとんど天草長石を使ってるわけで、泉山の濁手と言われるその土そのものの復元を、現在の有田自体が非常に熱心にとりこんでいます。こちらには作家のかたもい

らっしゃるし、研究者の方もいらっしゃるんで、豊北における窯がなぜたくさん出来て、だめになつたかという問題で、研究をしていたら、あるいはしてもらえないだろうかということが一点です。

二点目は技術の伝承という問題がございまして、実はやきものそのもの非常に良い技術者が少なくなっているというよりも、それを支える技術者そのもの、例えば釉薬を作る技術者、絵具そのものの技術者、あるいは、有田なんかだったら、濃みに使う筆を作る技術者、それらそのものがなくなつていいということです。そういった、そのやきものの技術を支えるもうひとつ下の技術そのものを、どういうふうにやっていくかっていうようなものも、ぜひテーマとして、考えていただけたらありがたいというふうに思います。

**吉留** 貴重なご意見、本当にありがとうございます。実はまだまだ豊北の知らないことってたくさんあるんですね。それで、こういうような機会を設けさせていただきまして、今後資料館としても学芸サイドのほうでも、出来る限りの事はしたいと思っています。しかし、その情報提供ですね。是非資料館の方あるいはミュージアムの方に、まずは投げかけていただければありがたいかなと思います。本当に長時間にわたりまして朝早くからありがとうございました。一応シンポジウムのほうはこれで終わりたいと思います。

## 閉会あいさつ

松下 それでは、最後にお礼を申し上げたいと思います。今日はお忙しい中おいでくださいましたみなさま方、それから壇上におられる諸先生方に厚くお礼



松下孝幸

を申し上げます。ありがとうございました。このシンポジウム名は、開館一周年記念ということになっておりますが、リニューアルしてから一周年を迎えたということでございます。

今回、リニューアルした一周年記念のテーマを器、やきものにいたしました。これは、平成9年から平成11年にかけて、「豊北町社会教育施設情報化活性化推進事業」、ちょっと舌を噛みそうな長い名前なんですけど、このような文部省（当時）の委託事業を受けまして、歴史民俗資料館に所蔵しております民俗資料をデジタル化する作業を3年かけておこないました。その中の目玉が、やはり豊北町に残っております窯、あるいはやきものでございました。

その時はすべての窯跡を調査をしたわけではありません。本当は発掘調査を一部、せめて物原の一部を発掘をして、それぞれの窯の特徴、やきものの特徴を調べ上げられればよかったです、そういうことはなかなかできません。

豊北地域には14も窯があったわけですけれども、大正期にすべてがなくなってしましましたので、歴史的に振り返ってなぜ14も窯ができたのか、そしてなぜ衰退したのか。そしてそれを踏まえて、私たちは今後どういうふうにすればいいのか、ということを考えていこうと思っておりました。ですから、いつもの民俗資料館のシンポジウムとは少し違っているとお感じになったんではないかと思うんですね。

渡辺先生には、総論的にやきもの全体の歴史、山口県内での概要をお話していただきました。それから、田畠さんには大甕ですね。私も弥生時代の大きな甕をどうやってつくるのかというのは、昔からほんとに不思議で仕方がなかったんですけど、以前、田畠さんから今日のような話を聞きして、現代にもちゃんとこういう技術が残っていることもわかりました。また、豊北町の窯業が衰退をしていった一因として、社会的な情勢の中にその原因があるのではないかという視点で、河田さんからお話をいただきました。そして宮田さんは、実際に当時のやきものを復元をするという非常に強い意志をお持ちで、実際に作ってらっしゃいます。そういう立場から非常に貴重な、我々が知らないことです。我々は、本で読んでなんとなくわかつたような気がして、人前でいかにも物知り顔で喋るんですけど、実際はやったことがない。ですから本当はよくわからないんですけど、そういった実際の立場からのことをいろいろ教えていただきました。このように、ちょっとみていただいてわかると思うんですが、今回の内容は歴史に絞ったものではありません。

ではこれから、こういう歴史を今からどのように生かしていくか、この教訓をどうやって生かしていくかという部分ですね。さきほど一番最後に吉留が言いましたように、これから先どうやって、例えば「豊北焼」、あるいは「北浦焼」を復活させてやっていくかっていうことが一番大切なことなんですが、これは何も豊北町だけに限ったことではありません。

現在陶磁器を生産しているところ、例えば有田焼が今何を考えてるかというと、これはきっとご存知だと思うんですが、今万華鏡を作っています。ご存知ですか。そして、今挑戦しているのは万年筆です。これがすごく売れてます。こ

の仕掛け人は、職人さんではありません。これは、やきものを納める箱を作っている方です。

要するに、私たちも同じなんですが、自分の専門でいろんなことを考えても、もう打開策をなかなか見つけられないんですね。それで、有田ではいろんな人がアイディアを出し合って、万年筆を作ってくれっていうことを仕掛けているんです。香蘭社など、今いくつかの窯と相談しながら、もう実際に万年筆ができます。そして日本人だけじゃなくて、外国の人が有田に来てそれを買っていきます。このように、やきものだから器を作らないといけないという発想ではなくて、他にもそういう技術が応用できる、そういうような発想が必要ではないか。さきほど付加価値をという話がありましたけど、新しい視点、つまり生活者の視点で、付加価値をつけていくといったことも必要ではないかと思います。

そのためには2つのことが必要です。1つはさきほど吉留が言いましたように、情報を我々に提供してください。つまり、地域に今まであった伝統的なものですね。本を読むと僕らはわかるんですけども、そこにたどりついでいるものもあります。伝統産業、ひょっとしたら織物が豊北町にもあったかもしれません。それから、伝統野菜です。今非常に注目されていますね。30年前までは地産地消っていうのは当たり前だったんです。ところが流通革命がおきて、ちょっとへんちくりんなことになってしまいました。だけど、萩の「たまげなす」であるとか、阿知須の「くりまさる」であるとか、岩国の「れんこん」であるとか、安岡の「かきちゃんしゃ」であるとか、こういったものが注目されています。だから、ひょっとしたら豊北町にもこうした伝統野菜、伝統的なものが残っている可能性があるし、これからそれを発掘して、本

当に今から復活させていけるかどうかですね。

それから問題はそれを担う人ですよね。ひょっとしたら豊北町の中では探すことができないかもしれません。しかし宮田さんのように、そういったことをやってみたいという人たちがよそからくる。そしてここでそういうものを作ってくれる。そういったことをやっていかないといけない。博物館の使命の中に、調査研究をやったりとか資料収集をしたりとか、啓蒙普及するということがあります。でも今求められているのは、人づくり、地域づくり、ものづくりを支援することなんです。だから、我々はいろんな歴史的なものを研究いたしますが、そういうものをみなさんと共有して、作り上げていきたい。

それから、さきほど2つありますといいましたが、1つは情報を提供してくださいということ。もう1つは組織を作らないといけないということです。例えば宮田さんの周りに応援団を作っていく。そしてこういうのを作ったらどうか。ああいうのはどうか、そういったしくみを考えていかないといけない。最近はやきものをやってくださる、つくってくださる方が結構いらっしゃいます。いろんな方がいらっしゃるので、必ずしも思いは一緒じゃないかもしれません、伝統を生かして新しいものを作っていくということを考えていらっしゃる方とチームを作って、ぜひ地域おこし、村づくり、村おこしというか、人づくりですね。そういったものをぜひやっていかなくてはなりません。そのためには先ほど言いましたように、博物館、資料館に情報を寄せさせていただき、私たちと一緒にこの豊北町を元気にしていきたいと思います。ぜひご協力ください。よろしくお願いします。本日はどうもありがとうございました。

---

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

## 研究紀要

第8号

発行年月日 2013年3月  
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム  
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8  
TEL 083-788-1841・1842  
FAX 083-788-1843  
印 刷 株式会社吉村印刷  
〒750-0004 山口県下関市中之町 5-9  
TEL 083-232-1190  
FAX 083-232-1189

---